

経験の現象的特徴の自然化について

—ドレッキの表象説の批判的検討—

新川 拓哉

はじめに

現代の知覚の哲学においては、経験の現象的特徴(phenomenal character)の分析をめぐって、さまざまな立場が論争を繰り返している。その分析における論点のひとつに、経験の現象的特徴は自然化されるか、つまり、経験の現象的特徴は自然主義的な枠組みに位置づけられるか、というものがある。知覚経験¹の表象説(以下、表象説とする)は、経験の現象的特徴の自然化を試みる有力な立場の一つである。表象説は、自然主義的な枠組みで扱うことができるとみなされている表象という道具立てを用いて、経験の現象的特徴の分析を試みる立場である。もし経験の現象的特徴が表象的な語り方によって分析されるのであれば、経験の現象的特徴を自然化する道筋が見えてくることであろう。しかし、表象という道具立てを用いた経験の現象的特徴の分析は、どれほどうまくいっているのだろうか。また、うまくいく見込みはどれほどあるのだろうか。本稿は、それらの問いに対する貢献を目指すものである。

本稿の目的は、経験の現象的特徴の自然主義的な枠組みへの位置づけが成功しているかどうかの基準を提案したうえで、実際にフレッド・ドレッキの表象説に対してその基準を用いた評価を行うことである。それゆえ、本稿における議論の射程は、表象説一般ではなく、ドレッキの表象説に限られることになる。ドレッキの表象説を取り上げる理由は、彼の議論においては、表象という道具立てによって経験の現象的特徴がどのように自然化されるのか、という要点が明瞭だということにある。

本稿における各章の構成は以下ようになる。一章では、経験の現象的特徴がどのようなものであるかを明示したうえで、経験の現象的特徴の自然主義的